

楓祭「東光会の部屋」今泉文子監督トークセッション

日時：2011年10月22日（土）14:00～15:00

皆さま、こんにちは。今泉^{あやこ}文子と申します。

私は生まれが、福島市です。育ったのも福島市で、それから東京に出てきて、映画の仕事をおもに岩波映画という映画会社でやっておりました。その岩波映画というのは1997年に倒産するのですが、倒産する前に、原宿にある、中谷宇吉郎（岩波映画の創業者、雪の結晶を研究していた物理学者）のお宅の一角にオフィスを構えさせていただいて、10数年たちます。

3月11日は東京會館で打ち合わせがありました。東京會館って結構がっちりした建物ですけど、壁のレリーフがこぼれ落ちるぐらい東京でもそれなりで、ラウンジのところの窓の外を見ていると、みんながいそいそと、普段通らないような人たちがヘルメットまでかぶって歩いていて、企業ってというのは凄いな、こういうときにヘルメットをぱっと渡せるような部隊を持っているのだなど、変なところに感心していました。そのあと、原発のことが起きました。私の福島の双葉郡に住んでいるおじたちは、最初は手前までの津波だったので大丈夫と思っていたのですが、そのうち、いやあ津波でねえ、逃げろって言われて、それが原発だったそうです。それで、福島の双葉郡浪江町^{きよはし}清橋ってところから、みんなで車に乗って何も持たずに逃げて川俣というところに行ったけれど、ここも駄目だというので福島に行って、そこも駄目だと言われて、夏場はあまり人のこない猪苗代町に落ち着いて…そこに会いに行きましたが、おじは、「オラ、こだどこで死なねえってば」って言うんですよ。「絶対、死ぬんだったら浪江さ帰って死ぬ」って。91歳で、多分、町で一番高齢なんじゃないかなと思います。故郷ってそういうものなのですね。でも、今、帰れない状況っていうのが強制的にありますから…。

で、私は何が手伝えるのか。ふつう、映画屋さんだと映像を撮って歩くということを昔だったらやったかもしれません。阪神大震災のときは、被災1週間のくらいから撮影に入ったりしましたから…。あのときの私はそういうことをしたけれど、今回はそういうことは…なんか気持ちが進まなかったんですね。ある朝、4月10日の日経新聞の三面を見ましたら、「いつもの年だと30万の人出のある『三春の滝桜』に、今年は多分ほとんど来ないのではないか」という記事が大きく載っていました。たった1本の桜の樹に30万もの人が集まり—全国各地から観光バスを連ねてくるそうです—、その桜の季節は、三春町の周辺は交通渋滞で、なかなか地元の人さえ見られない状態になる、それくらい人気スポットだったそうです。そこに誰も来ないと聞いて、「じゃあ、私は行こう」と思いました。その日に、池袋のスタッフがいる近くの喫茶店に集まってもらい、

みんなにこういうことだけれど行ってもらえるだろうかと話したところ、カメラマンはみんな質問もなく「いいよ」って言うてくれて、11日の早朝に出発して撮影を始めました。

茨城県、栃木県と入りまして、福島県へと入ると、道路がもうぼこぼこになっていて、岩手県や宮城県、気仙沼や石巻で見たようなあんな凄い景色ではないのですが、やっぱり尋常じゃないことが起きたということは少なくともわかる状態でした。それで、2週間、桜の花が開くまでスタッフがそこに踏ん張って、何を撮るといいうのではなく、ただ桜を撮るといいうことだけだったのですけれど、頑張ってくれて撮りました。2週間、朝から24時間回すのかと不思議に思われるかも知れませんが、そうではないんです。私の仕事の中に、国立天文台の仕事があったのですが、私どものカメラマンの中に、星空の微速といいうのを非常に得意とする人がいます。それは、星空がずうっと動いていく—すばる望遠鏡のラストシーンはそういう映像ですけれども—そういう微速度撮影という方法があります。お花が開くのを時間を速めて撮るやり方、微速度撮影で桜の樹を撮ったことは一度もないけど、やってみよと行ってくれました。1日が50秒です。1日50秒でまわして、夜中の3時くらいに宿を出まして、暗くなって8時、9時くらいまで撮影をしたという、夜が明けて昼間風が吹いたり、雨が降ったりといいうのを繰り返して、夕方、夜、暗くなってといいうのを2週間続けて、最後の2週間目の桜までいきました。わずか10分の映画なのでちょっと見ていただいて、そのあとご質問があればお聞きしたいと思います。音楽もボランティアで作曲家の友人がきてくれました。全員、スタッフは福島の人たちのためにといいうことで撮ってくれました。

(「三春」上映後に。)人の動きを観ていただいて、多分、“人間時間”といいうのを観ていただけたかなと思います。本当に、あの桜はこれからどれくらい歳をとるのでしょうか。1200年とも1400年とも言われていますが、まあ、人間は、日野原先生が100歳って頑張っていらっしゃって、私たち以降の人間はもっと早死にするのではないかと自分たちで言ってますけれど、少なくとも今日お越しのみなさんは、これからまだまだ華やかにお歳を重ねられるかと思ひます。なぜなら、みなさんのお顔がとていいからです。病気になることと、歳をとることは、これはもう当たり前のことだけれど、それを自然に受け止めるキャパシティがあれば、私はそれなりに人の命を使いきれるのではないかと思ひます。桜の樹は、そういう意味で本当にまだまだ何年、歳を重ねるのでしょうか、そういう気持ちがありますが、人間の動きのなんと慌ただしいこと。でも、慌ただしい中で、やっぱりみんなみんな、自分の生を生きて、死ぬまで生きていくわけですから、その生きている間に人として、人とのやりとりが交わせていけたら、もっと本当にいいなと思ひます。そういうのを、つまり年配の人が元気よく見せていくことが、このあとに続く人たちにつ

ながっていくだろうと。若い人たちが、なんか生きてることがつまらないな、携帯やゲームしか面白くないと思うのではなく、誰かの話を聞いたら嬉しいとか、誰かがにこにこしているのをみたら嬉しいとか、病気の人のおそばに寄り添っていたら最後にありがとうって言ってもらえて、すごく嬉しいとか。そういう、人として生きてきた甲斐があるということを若い人たちに伝えるのが、歳をとった人の役割だと。だから、私は歳をとるのはよいことで、いい歳のとり方を若い人たちに伝染させていく力を、多分この東洋英和のみなさんはお持ちじゃないかなと思います。なぜなら、ここに来る子供さんたち、みんな表情、いいですね。グループにつるむとどうなるか、それはわかりませんが（笑）。

でも、少なくともいい面を持っている。悪い面を持っていたとしても、いい面を持っているということはすごく重要なことで、いいものばかりというのはつまらないと思うんです。悪いものばかりも困るけれど、いいものを持っている人が悪い部分を少し抑えていく力を、この学校はもしかすると伝えられているのかな、というふうに思います。

この学校を田舎者の私が初めて見せていただいた昨日、今日の景色は、なかなか心に残るものであります。福島におりますときは、私の家は、駅と県庁のちょうど間で、福島の中では街中です。「今泉のうちは標準語だからなあ」と言われていて、そのつもりになって東京に出てきたら、「お国はどちらですか？」と必ず訊かれます。私は標準語を話しているつもりで。放送作家の方に「あなたの訛りはとてもいいから、なくさないように残していきなさいね」なんて言われて、「ええっ？」っていう感じでしたけど、今回震災が起きたときに、テレビの画面で、おじさん、おばさん、じいちゃん、ばあちゃんたちが、福島弁で語る言葉のなんといいこと！私、こんなにいい話をする人たちのそばにいたのに、全然気がつかないなあ。だから、歳をとるのはいいんです！歳をとると分かるのです、そういうことが。子供の頃は「標準語の話せる私の家族」なんて思っていましたけれど、実は「べえべえ」って言ってなかっただけで、十分に訛っていたんだと。そのことを、40年前もあぁと思いましたけれど、このごろは、別に訛っていてもいいや、訛っているから覚えてもらえるってこともあるなと思ってですね、私の訛りよりも本当に画面の中で出てくるおじさん、おばさんのあの喋りのなんて懐かしくて、いいこと。東京は一応都会人の集まりだと思いますけど、私のような田舎者の集まりでもありますよね、ある意味で。東京に来て何年か暮らしている人たちは、自分の故郷のことを今回の震災を通して思い起こすきっかけになったと思います。小学校の同級会に行きますと、みんな「いやあ、地震のときはもう死ぬかと思った。5分も続いてたんだよ。わかっかい？」って言われました。5分も続く地震なんていうのを経験したことないですよ。こんな凄いこと、こんなとんでもないこと、誰も思わなかつ

たことを、東北の人たちはみんな今回経験したわけです。このことが6カ月、7か月過ぎて薄らいできたと思っていて、募金活動をしている人たちが今日藤沢駅にいましたけれど、そういうものなのだろうなと思いつつ、でも、いざというときは、生きているうちに、やっぱりくることがあるんですね。なんにもなくて、ぼうって行くのもいいけれど、大変な目にあっていくのも、それなりに力をもらえるというか、考えたこともないようなことが起きて、じゃあこんな大変な目にあったときにどうすれば死ぬまで生きていけるんだろうかと思うことは、ある意味で私は、すごく大切なものを神様が采配をふるってくれたのかもしれないなと思います。よりによって日本は、なんで何度もこんな大変なことが起きるのだろうと思いますけれど、今、日本だ、中国だ、アメリカだ、ではなくて、本当に地球規模で、地球の中で、いろんなことが起こっていて、シリアで起きたこともすごいことですが、ちっちゃい子供がこんなして旗振って喜んでいて、そういう国って今の日本では考えつかないですよ。国の独裁者という言葉も、どんなふうにして独裁者になっていくのか、私もわかりませんが、あのちっちゃな、まだ幼稚園生くらいの子供が車の上で旗を振って「ああ、いい国になった」というのは、日本じゃ考えられないような国ですよ。でも、子供にああいう景色を見ておきなさいということもやっぱり必要だと思いますね。何か起きたときに、それがいいのか悪いのか、分からないことは取りあえず決めないで置いて、分かる時がきたら分かればよいというようなことを。今、私は63歳になりますけれど、歳をとってくるのがいいというのは、そういうことを自分で、ちょっと昔だったら全然思いもつかないようなことを、ああでもないだろうか、こうでもないだろうかって思うことができるのが、ある意味で、大変な目にはあうけれども、人としての物の見方、力のつけ方とか、そういったものを、見えない何かを試されているのだろうなと。だから、死ぬまでは生きようよ、病気になっても、誰かはさすってあげようよ、と申し上げたいのです。

映画の力は限りがありますけれども、多少なりとも福島で、震災だ、放射能だといっても、桜は、1000年もの命を永らえているし、子供もやっぱり生きています。私の姪の子供がこの夏、私の家は鵜沼海岸のそばですので、夏休みに泊まりがけで来ました。文子おばちゃん家に来て嬉しかったことって葉書が来て、「海に入れたこと。水族館に行けたこと。一番嬉しかったのはマスクをはずせたこと」って書いてありました。74歳になる連れ合いと、ちょっと、泣けちゃう葉書だよなって言って…。でも、子供は、やっぱりけなげに、自分なりに受け止めて暮らしています。

なんらかの形で、福島のこと、それから東北のことを思い起こされることがありましたら、皆さんでできること、なにもしないこともできることのひとつかもしれませんけれども、想いを寄せていただくこと。そんなことが、今日この映画を観ていただいた私からのお願いです。

三春町でもこの映画を上映しました。畑を貸してくれた方たちを対象に、マホラホールという立派なホールで上映したのですが、おじさんたちが観終わったら「オラ、泣げた」って。三春の滝桜は今天然記念物になっていまして、天然記念物になっているから柵があって、今はそこから先に入れないんですね。見学する人は、こういう線が引かれているところを行ったり来たりして、あとはずうっと遠巻きにして見るのですが、「オラたち子供んときは、あの枝さ登った」って。「なんだか、この映画観たら、オラたちの子供の頃を思い出して、嬉しかった」と言われました。天然記念物って、今度、小笠原なんかも世界遺産になったりしましたけれど、ああいうのが本当にいいのかなとか。そうやって権威が与えられることと、それで観光客がばあっと来ることで、本来自然が持っていた土地の人たちの暮らしにつながる美しさというものが奪われていた現実というのがやっぱりあるわけですね。おじさんからそういうことを聞いて、こんな撮影は多分今年しかできない撮影で、来年になるとまた観光客は来るのかもしれない、それはそれで町が立派なホールが作れるような財政がそこでできるんでしょうけれども、立派なホールじゃなくても、なにかおじさんがひょいとして出てきて、『おらがのこの桜、みてくんじゃ』って言ったら、なんか、いいような気がするのですが、経済がすべてに優先される今の世の中の移り変わりというものの中で、震災や世界的な不況も含めて、今だからこそ考えられることがあるのではないかな。なくなるときこそ、自分たちが大切にしたいもの、例えばこの学校だったら、後輩の人たちにつなげていく、何かつながるもの、ここを育った人たちがこうやって横の連絡をとりながら顔を合わせる嬉しさみたいなもの。そういうものが一つひとつ、大切なことのように思われてなりません。

震災は、とんでもないことが起きたなと思うけれども、とんでもないことが起きた時に人としてやれることはそれなりにある。だから、絶望という言葉の前にとりあえずやれることはやりたいなど。私も、放射能・原発のときはすぐには絶望感に襲われましたけれど、この映画を撮ったことは私にできる第一歩だというふうに思って、この映画を作りました。福島出身は私1人でしたが、スタッフのみんなは福島に行ってみて、福島の人たちがどんな思いでいるのかを彼らなりに分かってくれた、それで充分だと思います。今日、映画を観ていただいたみなさんの中にも、もしかして福島のことをテレビや新聞などで出てきたときに、ちょっとつなぎ合わせて観ていただくきっかけになることができれば、私としては嬉しい、そう思います。

以上